

宮崎文化振興協会理科教育施設におけるSDGsへの取組の充実 ～主催事業及び展示物等へのSDGsロゴの添付、活用を通して～

協会事務局
学校連携・教育支援調整監 林 政孝

【要 約】

本研究は、主題を「宮崎文化振興協会理科教育施設におけるSDGsへの取組の充実」、副題を「～主催事業及び展示物等へのSDGsロゴの添付、活用を通して～」とし、「持続可能な開発目標（SDGs）」を宮崎文化振興協会（以下、当協会とする）理科教育施設（大淀川学習館、宮崎科学技術館）の事業及び展示物等と結び付け、当協会のSDGsへの取組を充実・深化させたものである。これにより、SDGsで取り扱われる課題をより深く理解するための教育プラットフォームとして、当協会理科教育施設の活用を図った。

はじめに

昨今、社会的にも取り上げられることが増えてきた持続可能な開発目標（SDGs）の17の目標と169のターゲットは、2030年までの達成に向けて、更に重要性が増していくと考えられる。昨年度の研究では、当協会の理科教育施設である宮崎科学技術館において、SDGsとの関係性の考察、主催事業や展示物のSDGsに照らした整理・分類、SDGsの内容及び重要性についての職員研修を行い、SDGsへの取組の方向性を示すことができた。今回の研究では、同じく当協会の大淀川学習館においても同様の取組を進め、更に当協会の理科教育2施設におけるSDGs推進のための実践を行うこととした。

第1章 大淀川学習館におけるSDGsについての職員研修

宮崎科学技術館と同様に、SDGsに対応した今後の館の運営のためには、職員全体での深い理解と取り組むための方向付けが必要であると考え、職員研修を行った。

職員研修は次の①～⑤の流れで行った。プレゼンテーション資料の一部を次頁に示す。

- ①SDGsとは何か
- ②世界及び日本の博物館類似施設の動向
- ③大淀川学習館が取り組む必要性について
- ④外務省、文部科学省の動向及びESD（持続可能な開発のための教育）について
- ⑤各事業やチラシ・ポスターへのSDGsロゴ等の活用について

SDGsっていつできたの？何するの？

2015年9月の国連サミットで全会一致で採択。

目的：「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現すること。

2030年を年限とする17の国際目標を策定。
(その下に、169のターゲット、232の指標)

＜補足＞
前身：ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）
2001年に国連で専門家の議論を経て策定。
発展途上国向けの開発目標として、2015年を期限とする8つの目標を設定。
(①貧困・飢餓、②初等教育、③女性、④乳幼児、⑤妊産婦、⑥疾病、⑦環境、⑧産業)

大淀川学習館は・・・

- 教育関連施設（学習指導要領に基づく学習利用の促進）
- 展示物の特性
- エコアクション環境宣言

つまり、SDGs達成に向けて

大淀川学習館の果たす役割も大きい!!

＜SDGsロゴの使用方法＞

a) SDGsロゴ・バージョン2には「（主体名／私たち）は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています」という文言を添えること。

b) SDGsカラーハイルには「（主体名／私たち）は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています」という文言を添えること。



＜SDGsロゴの使用例＞



展示物や各事業のチラシ・ポスターへのSDGsロゴの添付活用を積極的に行ってはどうでしょうか？

職員研修を行ってみると、SDGsという言葉を知っている職員は多かったが、その内容まで正確に把握している職員は少なかった。本研修を通して、職員のSDGsについての理解が深まったことで、ロゴ活用や実践への意識付けが行えた。今後、当協会理科教育施設をSDGs教育のプラットフォームとするため、ロゴの活用と来館者への啓発を推進するとともに、更なる当協会職員への意識付けや研修が必要である。

第2章 SDGsロゴの添付活用及びSDGsに関する取組の実践

第1節 大淀川学習館における実践

1 SDGsロゴの添付活用

まず、大淀川学習館がSDGsに取り組んでいることを示すロゴを、国連広報センターのガイドラインに従って図1のように作成し、利用者が目にするであろう様々な掲示物等に添付し、視覚的に周知を図った。TVや新聞等でも頻繁にSDGsの特集が組まれている現状もあり、利用者に違和感なくリリースできた。

今回、ロゴの添付を行った箇所は、①街頭看板 ②企画展・行事案内 ③ホームページ ④環境関連の展示物である。ロゴの添付により、大淀川学習館が世界の動きと同調し、率先してSDGs推進に取り組んでいることが周知できたとともに、大淀川を中心とした環境教育を推進するという設立の目的推進にもつながったと考える。ロゴ添付の詳細は次頁の図2～図5に示す。

図1 大淀川学習館SDGsロゴ



図2 大淀川学習館街頭看板



図3 行事案内、企画展チラシ



図4 大淀川学習館ホームページ



図5 大淀川学習館展示物



2 各事業へのSDG s の導入

SDG s ロゴの添付活用を行ったことに加えて、各事業の一部にSDG s に関する内容を導入する試みが行われた。

(1) 企画展への導入

令和3年度企画展「昆虫食～おいしいむし～展」において、SDG s 目標2、8、13と昆虫食のつながりを解説するパネル展示やSDG s クイズが実施された。熱心に解説を読む大人や楽しみながらクイズに挑戦する子どもの姿が見られた。また、「金魚・メダカ・カメ展」においては、SDG s 目標6に重点を置き、家庭にある不用品や廃材を用いた水槽づくりを紹介した。企画展の様子を図6、図7に示す。

図6 昆虫食展解説パネル



図7 金魚・メダカ・カメ展廃材水槽



(2) SDG sに関する講演会の実施

初の試みとして、「SDG sと生き物たち」と題して職員による講演会を実施した。昆虫、鳥類、魚類と自然環境について専門的な視点から講演を行った。様子を図8、図9に示す。

図8 講演会タイトル



図9 講演会の様子(昆虫の話)



(3) 教室事業への導入

大淀川学習館が実施する各種教室事業において、SDG sの内容を導入し、SDG sの紹介と自然環境保全についての啓発を行った。教室の様子を次の図10、図11に示す。

図10 チョウの学習の様子

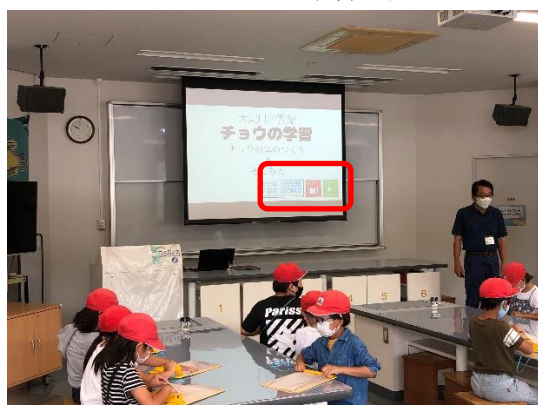


図11 小学校出前授業説明資料



3 SDG sに関連する次年度事業計画の構築

2030年までの達成を目指しているSDG sは今後更に注目度が増すと思われる。これを鑑み、大淀川学習館においてSDG sと関連性がある事業を充実させるための次年度事業計画の構築を行った。次年度予定されている関連事業は下のとおりである。

(令和4年度の主な関連事業)

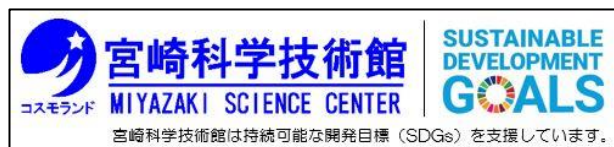
No.	企画展・イベント名	実施時期・期日 (予定)
1	水の生き物をよく知ろう! ザリガニ展	4月26日(火)～6月5日(日)
2	身近な生き物と環境展(仮名)	11月5日(土)～12月11日(日)
3	川の生き物で水質環境調査(春・夏・秋)	5月22日(日)、5月29日(日) 7月17日(日)、10月9日(日)
4	水を浄化してみよう!	8月11日(木)、8月13日(土)
5	河川や動植物に関する講演会	11月23日(水・祝)
6	大淀川や生き物に関する出前講座	依頼により通年実施

第2節 宮崎科学技術館における実践

1 SDG s ロゴの添付活用

大淀川学習館と同様に、宮崎科学技術館がSDG sに取り組んでいることを示すロゴを、右の図12のように作成し、関連する展示物に添付することで周知を図った。

図12 宮崎科学技術館SDG s ロゴ



今回、ロゴの添付を行った箇所は、触れる地球儀やエネルギーサーカス、サテライトシアター等の環境関連の展示物である。ロゴの添付により、宮崎科学技術館が科学技術についての啓発を行っていることと併せて、率先してSDG s推進に取り組んでいることが周知できた。

ロゴ添付の様子を下の図13～図15に示す。

図13 展示物「触れる地球儀」



図14 展示物「エネルギーサーカス」



図15 展示物「サテライトシアター」



2 教室事業におけるSDG s の推進

宮崎科学技術館では、教室事業の内、小学校5年生対象のサイエンス親子学習教室及び小学校教諭対象の科学実験講座において、説明資料にSDG s ロゴを添付し冒頭でSDG s の話題に触れ啓発を行った。

今後も折に触れてSDG s についての啓発を行うことが、理科教育施設としての価値を高めることにつながると考えられる。教室の様子を次頁図16、図17に示す。

図 1 6 サイエンス親子学習教室



図 1 7 教員のための科学実験講座



おわりに

今回、第 1 章で示したとおり、昨年の宮崎科学技術館と同様に、大淀川学習館において SDG s に関する研修を行ったことにより、当協会理科教育施設職員の SDG s についての理解が深まり、今後の理科教育施設における取組の方向性を示すことができた。

また、第 2 章 第 1 節、第 2 節で示したように、当協会理科教育施設（大淀川学習館、宮崎科学技術館）において、展示物や各事業等で SDG s ロゴの添付活用や内容の啓発が行われ始めた。方向性が示されただけの昨年度と比べると大きな進展である。このことは、SDG s 教育のプラットフォームとしての両館の価値を高めるとともに、両館を運営する当協会の存在意義にも大きく寄与するものである。

今後の課題として、今回研究した SDG s については、2030 年に向けて更に重要性が増してくるものと思われる。今回は当協会の理科教育施設を主な対象として研究を行ったが、今後は当協会他施設においても同様の研究・実践を進め、協会全体として SDG s に取り組むことが必要とされる。そのために、全国の先進施設の取組を調査し、その上で当協会独自の取組を模索していく必要があると考える。

引用文献・参考文献・参考資料リスト

- 1) 国際連合 <https://www.un.org/>
- 2) 外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>
- 3) 文部科学省 <https://www.mext.go.jp/>
- 4) 総務省 https://www.soumu.go.jp/toukei_toukatsu/